
その手は自由

らた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

その手は自由

【Nコード】

N1643Z

【作者名】

らた

【あらすじ】

ぬるいものねだりの味がする。

「あなたはいつも人気者だ」

「そういう君は陰気モノだね」

「まったく、ねたましい」

私はそう言っただけで彼の瞳から目を逸らした。すると彼は心底困ったように「機嫌を損ねた」と呟くので、私は少し控えめに彼の左の手のひらを握った。

「あなたはなんでそう、人から好かれるの」

「好かれないからだよ」

「なんでそう、人から好かれないの」

「自分の価値を知るために」

「なんでそう、価値を知るの」

「君にはわからない」

彼はぐっと堪えたような表情で見つめてきた。私は少しむっとしたので、そっぽを向いてしまった。

「わたしは、わかりたくもない」

「じゃあどうして、一緒にいてくれるの」

「まったく、ねたましい」

「僕は、誤った感情を作り出す手のひらを持っているのかもしれない
い」

「嘘だろ」

「僕は、血を流すためだけに腕を取り付けられたのかもしれない」

「嘘、だろ」

「嘘じゃないかもしれない」

「まったく、ねたましい、よ」

彼の言葉を耳にして、脳味噌が届くまでの時間が酷く気味が悪く、

しかも何故か中毒性のあるもので、耳から入る麻薬でもばらまいているのかと思うくらい彼の言葉は殺人的だ。私はだんだんと恐ろしく胸が痛くなっていくのを感じて、彼の指先から手を離して、両手で顔を覆った。

「泣いているの？」と彼が心配そうに訊くので、私は顔を上げて彼の瞳を見た。

すると、そこには私が映っていないかもしれない、そんな不安がザアザアと寄せてきたのだ。

「いつか僕を嫌いになるよ」

彼はそう言って、私の頬に手を伸ばしては息を殺した。彼はまるで虚しさが滴り落ちるような笑い方をしていた。私はその冷たい手のひらの感触から世界の終わりを探すように目を閉じた。

「どうか、どうか」

彼の小さな悲鳴は何時になっても鳴り止まず、私の心をかき乱すのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1643z/>

その手は自由

2011年12月5日22時52分発行